［平成11年度共同研究報告］

造形のフィットネス－事例研究

上田恒夫　「造形のフィットネス」
服部光彦　「屋外広告物と都市景観」
鍔　隆弘　「美大キャンパス修景計画」
坂本英之　「建築空間のフィットネス」

研究報告にあたって

この共同研究報告は造形表現にはたらく外在的諸要因に着目し、両者の関係をフィットネス（適合、適切さ）の観点から検討することを目的としている。通常の表現論と比べて、言わばバイアスがかかっているが、フィットネスの問題をつきつめていくと結局は造形表現そのものの問題にふれることになる。西洋古代以来この問題について多くの著作が書かれて来たのはそのためであった。

したがって私たちのテーマは特別のものではなく、20世紀の芸術のジャンルで小休止していたにすぎない。そしてそのときがまさに、いわゆる純粋芸術とデザインとがはっきりと専門領域として分れた時代で、以後、2つのジャンルに通底する造形の質がわかりづらくなったという事態が生じた。

そうだとすれば、近代のモダニズムの文化が終焉したと言われる今日こそ、このテーマに再度光があてられるときだと思われる。どのようなジャンルにも表現のあるところ必ずフィットネスの営為があるから、それを認めて2つのジャンルをもう一度ひとつのものとして見直してみたいというのが、私たちのこころざしであった。

そのためには、自律化を志向した近代芸術と、反対に外部からの要請を受け入れてはじめて成り立つデザインとの比較検討が必要であり、専門の異なる4人で協力して研究することになった。

ここで、論題にある「フィットネス」の語を選んだことについて説明しておきたい。

私たちは日本語の語彙から単語を選びたかったが、適切な言葉が見あたらなかった。「しつらい」とか、装備、装束、艤装といった成句に見る「装」はフィットネスの本義と響きあうものをもっている。しかしそれらを私たちの文脈で使うと、例えば「フランス近代絵画のしつらい、装」などと妙なことになってしまう。

ひるがえって美的概念としての英語の「フィットネスfitness」は、ラテン語の「デコールムdecorum（適合）」の訳語である。私たちはフィードバックしてこのラテン語の選択も考えたが、この言葉には古い「適合論」の観念がまとわりついている。

そこで検討した結果、やむなく「フィットネス」の語を英語から借用することにした。この英語には、今も生活のなかだけでなく、「最適者生存the survival of the fittest」のごとく、学術用語としても生きているという強みがある（ただしここでは形容詞の名詞化）。また、スポーツクラブで見かける「フィットネス」（健康状態・ベストコンディション）に引きずられて、私たちの論題を「造形のベストコンディション」と読まれた方がいたとしても決して間違いだとは言えない。ドイツ語に英語から借用した「フィットfit（体調のよい）」という形容詞が日常会話で使われていることも「フィットネス」という英語を選んだ利点に加えてよいだろう。ただしドイツ語では学術用語としての「適合」にはこれとは別のdas Schickliche などが使われ、日常の言葉から遊離している。こうした点でも、同系統の言葉でありながら英語の「フィットネス」の方に意義ありと

［キーワード］フィットネス　適合　様式　アーバンアド

再確認できる。

しかし「フィットネス」が造形のジャンルではなじみの薄い言葉であることは事実だから、以下の報告で使われる「フィットネス」の語は、適宜「適切さ」「適合」と読みかえていただいてかまわない。

次に指摘したいのは、このテーマの必要に応じて、私たちがそれぞれの担当する授業に相互乗り入れしたり、私たち以外の先生方に私たちの授業に協力していただいたことである。屋外キャンパスに出て学舎の「フィットネス」を観察をし、学内外のアーチストのアトリエを訪問して作品を現場で検討することも少なからずあった。4編の報告には特に明記されていないが、それらの成果も取り入れられている。途中であるがここで、快く私たちに協力して下さった先生方に厚くお礼申し上げたい。

そのほか私たちは、音楽鑑賞など美術以外の体験も広げた。そのような体験もこの報告書には直接あらわれていないが、造形のフィットネスの問題をほかのジャンルから照らし出してくれるよい機会となった。

こうして、我が校、我が街金沢のことはなかなか客観化できていなかったことをこの研究を通じて思い知らされることになった。

私たちは本学の授業で「造形のフィトネス」のテーマを主に「外的要因の表現への転化」の問題として取り上げた。それぞれの専門とする分野での事例を挙げて学生に問題提起したが、全体として私たちのテーマは必ずしも正面から受け止められなかったようである。今日明日の自分の制作を、論文をレポートをどうしようと思案している学生に対して、造形の外側から来る要素を検討しよう、というのがそもそものさしさわりになったように思われる。

また、古典的作品の現場状況の説明（これはフィットネスの問題としてとらえるときどうしても必要である）は、写真でしか作品を見ることができない学生にとっては隔靴掻痒の感を免れなかっただろう。さらに、芸術系の学生には「フィットネス」はデザインの問題ではないかという気分がある一方で、デザイン系の学生にとってはフィットネスはあまりにも自明なことなので、それを改めて客観的にとらえることがかえって難しかったようである。

そうしたなかで、美大キャンパスのマケットを示して臨んだ演習（鍔）では、このテーマは率直に理解された。図書館棟増築部の実地見学（坂本）でも、学生の反応がよかったのは言うまでもない。テーマをモノに即して提示することはきわめて有効である。

ともかく、「造形のフィットネス」は近代芸術とデザインを再検討するという積極的な意味をもっているから、今後も引き続き授業で取り上げて行きたいと私たちは考えている。

最後に、4編の内容の概要を示しておく。

上田論文「造形のフィットネス」はこの問題を今日取り上げる意義に触れつつ、西洋古代から20世紀までのフィットネスの展開をさまざまなジャンルに見、フィットネスの営為が造形表現の根幹にかかわる問題であることを喚起し、共同研究の序論的性格をあわせもつ。

服部論文「屋外広告物と都市景観」は屋外広告物と景観との整合性の問題を取り上げ、広告物のデザインや制作プロセス上の視点だけでなく、行政レベルの具体例を挙げて報告する。

鍔論文「美大キャンパス修景計画」は、既存の本学キャンパスを対象（与件）として取り上げ、人為・自然・歴史環境とキャンパスとの関係を再検討し、より豊かなキャンパスをつくろうとするランドスケープ・デザインからの提案である。これは来年度に着工が予定される本学キャンパス修景工事の基本設計の要約でもある。

坂本論文「建築空間のフィットネス」は、当年度に完成した本学附属図書館増築部の建築本体各部分のフィットネスの問題を、次いで、増築部と既存の図書館棟を含むキャンパスとのフィットネスの問題を取り上げ、図書館本来の機能・役割との関係でどのように設計するに至ったかを報告する。

（執筆者一同）

（平成12年10月27日受理）